

第一回俳句賞「25」奨励賞

蒼き呼吸

開成高等学校

冬ざれの一片として掛かり舟
凧の果てに卵の販売機
温室にゼリーのやうな陽が澱む
花の名を教ふる人も着ぶくれて
雨に影しつかりとある冬菜畑
帰るでもなくて羽子板市のなか
酢莖買ふ頬骨の出た男から
横たへて夜の昏さの氷柱かな
杉蘇の蒼き呼吸やクリスマス
水琴窟聞くマフラーの危ふくて
葛湯のむ底のそのままさざれ波
年用意猫の日向を拭きにけり
ゆく年や画鋏に残る切れつ端
参道のひかり啄む初雀
母が付けしこの名が好きで新日記
鳥総松影のひとすぢ震へけり
飛んでゐる夢を見てゐる破魔矢かな
ひゆるひゆると空掬ひとる二重跳び
雪まみれのからだをバスに押し込みぬ
除雪車が翼のごとく雪を吐く
セロリ噛む眉のはつかに上下して
にんじんの舟めくビーフシチューかな
毛糸編む鎖骨のうつくしく動き
菓飲む前のひとくち室の花
電話帳黄色くにほふ四温かな